MUSASHINO for TOMORROW Vol.129

巻　頭

夢を貫き、己を磨く

前野ウルド浩太郎（昆虫学者）

Campus Eye

シカゴに響いた武蔵野サウンド

～ウィンドアンサンブル米国演奏旅行レポート～

表紙：江古田キャンパス　展望ラウンジ“Bis”

April 2019
vol.129

創立90周年を迎えるにあたって

武蔵野音楽大学学長　同附属高等学校校長　福井直敬

歴史的な改元を目前に、平成31(2019)年度の幕が上がりました。前号でも述べましたように、時を同じくして本年、この江古田の地で昭和4(1929)年に呱々の声をあげた本学は、創立90周年の節目を迎えます。多くの起伏を乗り越えて今日まで発展することができましたのは、関係各位の温かいご理解、ご支援の賜物と、改めて深く感謝申し上げます。

過ぎ行く平成の時代を顧みますと、その元号の求める意味と現実とはいささか乖離があり、この間、政治、経済、社会等、いずれについても大きな出来事が継起しました。さらには自然災害も多発し、時の流れの早さ、社会の変化の激しさは、今さらながら驚くばかりです。中でも少子化と高齢化の同時かつ急速な進行に起因する諸々の困難は、解決の糸口が見えず、加えて短期的には変化が見え難いので、私たちそれぞれが大きな関心を持つべきことであろうと考えます。

さて、大学や高等学校に関して見ると、平成時代の初期に200万人を数えた18歳人口は漸次減少し、2040年には88万人が予想され、すでに学校経営に大きな困難をもたらしています。そこで政府は、支援が必要な低所得者層に学費の支給及び授業料等の減免の措置を講じ進学を促す一方で、各大学には、教育の質の向上と経営力の強化を一体的に推進することを求め、間もなくこれらに関わる法令の改正も予想されます。

本学園では、新キャンパスの完成により教育環境が格段に改善されましたが、さらなる充実、改善に努める一方、FD、SDの強化、新たな評価基準による厳格な成績評価の実施と可視化の工夫、高等教育無償化制度における機関要件の確認申請の準備、今後とも増加が予想される留学生への支援の強化、私立学校法の改正に反映されるであろう情報の公開やガバナンスの改善、強化等々、山積する課題に鋭意、着実に取り組んでまいります。

創立100周年に向け新しい歩みを進める本学園に、皆さまの温かなご支援、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

バッタの幼虫の群れに囲まれて
（撮影：川端裕人氏）

夢を貫き、己を磨く

前野ウルド浩太郎
昆虫学者

「さぁ、むさぼり喰うがよい！」と、全身を緑色のタイツにつつんでバッタの大群のなかに飛び込んだユニークな昆虫学者がいます。その人こそ、“バッタ博士”こと前野ウルド浩太郎さん。バッタ駆除の研究のためにアフリカ・モーリタニアに乗り込み、そこでの波乱万丈の体験と研究成果をまとめた著書『バッタを倒しにアフリカへ』（2017年刊）はベストセラーとなり、数々の賞も受賞しました。ファーブルに憧れた少年が、いかにして昆虫学者として身を立てるという夢を叶えることができたのか、その道のりはドラマチックかつ示唆に富んでいます。

前野 ウルド 浩太郎
Koutaro Ould Maeno

昆虫学者（通称：バッタ博士）。1980年、秋田県秋田市生まれ。国立研究開発法人 国際農林水産業研究センター研究員。神戸大学大学院自然科学研究科博士課程修了 博士（農学）。京都大学白眉センター特定助教を経て、現職。アフリカで大発生し、農作物を食い荒らすサバクトビバッタの防除技術の開発に従事。モーリタニアでの研究活動が認められ、現地のミドルネーム『ウルド（～の子孫の意）』を授かる。著書『孤独なバッタが群れるとき』（東海大学出版部）。『バッタを倒しにアフリカへ』（光文社新書）が、毎日出版文化賞・特別賞、新書大賞2018、ブクログ大賞（エッセイ・ノンフィクション部門）など受賞。

砂漠で刺身を食べるまで

「あぁぁ　刺身が食べたい」 ヤギ肉の煮込みが続いた身体が魚の刺身を欲している。サハラ砂漠に出張で来ているが、滞在先が海沿いの国なので港に行けば鮮魚を買える。現地では刺身なんか売っていないから自分で作るしかない。断水しまくりの我が家の台所で魚をさばくのは衛生上良くないし、そもそも面倒だから買ったその場で魚を下ろしてもらうことにする。

砂浜に隣接する魚市場で物色すると、サワラがいるじゃないか。財布をポケットから出して、買う素振りを見せるやいなや、すぐさま道行く男たちが群がってきた。買った魚を入れるためのビニール袋を売りつける男や魚をさばいて小銭を稼ごうという男たちだ。素手で魚を持ち運ぶのは忍びないので、とりあえず袋を買って魚を入れる。一人の男が、さばくならオレに任せなと自信ありげに言うので、彼のまな板置き場に付いて行く。気温40℃の環境下でまな板を洗いもせずに次々に魚をさばいているもんだから、まな板は黒光りしていて不衛生極まりないが、後で切り身を洗って清めたらいいやと三

▲ 活気溢れる港（モーリタニア）

枚におろしてくれと頼む。

腕前を拝見するものの、せっかくの魚がボロボロになっていく。使っている包丁が露骨にボロい。いくら腕が良くてもそれじゃあ無理だ。男に見切りをつけ、お前じゃなくて別の人にさばいてもらいたい旨を伝えると、素直に受け入れてくれて、近くのまな板に半身を置いてくれた。男の親切心とは裏腹にあろうことか、そこではフグをさばいているではないか。食べ物を粗末にしたくないが、フグ毒にまみれたかもしれない食材は大切にしなくても罰は当たらないだろう。半身におさらばし、結局二匹目を買ってきて別のまな板を保有する男にさばいてもらう。さっきよりは上手にさばいてくれたが、さばき料として相場の10倍をボッタくってきた。傍らにいた私のアシスタントが激怒し、男と言い争いを始め、警察が駆けつける騒動に発展した。事情を理解した警察は不正を働いた男を連行していった。一悶着あったが、ビニール袋に入った魚の切り身を握りしめ、帰路につく。最後の仕上げをし、念願のお刺身にありつくと、ほんのり脂がのっていて美味い。やれやれ、苦労したかいがあった。

凡人だって、夢を追いたい

なぜこんなエッセイを冒頭で紹介したかと言うと、登場人物の中に世渡り上手なヤツがいることを示したかったからだ。ビニール袋売りの男だ。普通なら100円の袋を200円で売っているくせに、みんなから感謝されている。これは、日本でも山頂の自動販売機や高級ホテルのジュースがやたらと高いが、ありがたく買ってしまう状況に似ている。同じような商品がそこら中に溢れている状況では見向きもされないが、数が少なく、必要とされるところにいるだけで希少価値が上がり、重宝されているのだ。当たり前の話だが、これを就職に当てはめたらどうなるだろうか。凡人でも、必要とされたら就職できてしまうではないか。

▲ バッタの行方について遊牧民から情報収集

▲ 小高い砂丘の上から大群の行方を探る

就職は、ある意味自分が商品となって売り込むことになる。とくに専門的な技能で勝負する職種では、思いっきり『品定め』をされる。大好きな絵を描いたり、音楽を奏でたり、歌をさえずりながらお金を稼ぎ、飯を食っていけたら最高だ。しかしながら、世の中にはライバルがひしめき合っており、自分の技能を武器にして生活していくのは簡単ではない。ズバ抜けた才能がある方々はあっさりと貴重なポジションを獲得していくが、あいにく優れた能力に恵まれている人たちの数はわずかで、まぁまぁの能力を持つ凡人たちが大半を占めている。やりたいことがあるのに能力が際立っていないため、職にありつけず、飯を食っていけないのは残念なことである。天才と呼ばれる人たちと凡人である己を比較して勝ち目がないことを悟り、その道に進むのを諦めてしまう人たちが一体どれだけいることだろうか。競争社会では当たり前の話だが、平凡な技能ながらも専門的な仕事をしながら生きていけたらどれだけ多くの人たちが贅沢な人生を送れることだろうか。かくいう私も平凡にも関わらず、なんとか専門職に就いている。しかも、音楽家よりも圧倒的に需要がないバッタ研究者として生き延びている。私は音楽には縁もゆかりもないが、専門職で生きようとする姿に何か通ずるものがあるのだろうか、寄稿の依頼を頂戴した。担当者の期待を裏切ってひたすらバッタの解説するのも一興だが、就職を気にしているお年頃の読者が多いと思い、これから私の夢がからんだ就職活動について紹介していきたい。

舞台探し

私は、子供のころに読んだファーブル昆虫記に感銘を受け、将来は昆虫学者になる夢を見て、博士号を取得した。しかしながら、『学者』になるためには発達した頭脳と輝かしい業績が必要となってくる。どちらも平凡なのに、過剰に生みだされた博士たちを差し置いて、就職(ポジション)を勝ち取り、なんとかして昆虫の研究をして飯を食っていけないだろうかと思い悩んでいた。

博士号を取得した後、定職に就くまではポスドク(ポストドクター)として、1、2年の任期で点々と研究室を渡り歩くことになる。40歳を越えるとポスドクの口すら見つけられないと聞き、時間との勝負を余儀な

▲ フィールドワーク中（撮影：川端裕人氏）

くされた。自分が研究テーマに選んだのはバッタだが、現在の日本ではバッタの被害はほとんどないため、バッタ研究の必要性は低く、日本にはバッタ関係の就職先はありそうにない。かといって今さら別の昆虫に鞍替えしても、優秀なライバル達には勝てそうもない。手持ちの能力が最大限に発揮でき、かつ誰も研究していない『舞台』に辿り着くことができれば、少しは勝機が見えてくる。ふと、日本にこだわる必要はないことに気づき、世界事情を調べてみると、バッタ問題に頭を抱えている場所があった。彼の地アフリカでは今でもバッタが大発生して農作物を食い荒らし、深刻な飢饉を引き起こしている。そんな重大な国際問題なら、さぞかし世界各国が力を入れて研究し、ほとんどのことが解明され、いまさら日本の研究者なんかお呼びではなさそうだ。と、思いきや、過去40年間、修行を積んだバッタ研究者は、誰もアフリカで腰を据えて研究しておらず、おかげでバッタ研究の歴史が止まったままだということに気がついた。誰もやっていないのなら、平凡な私でも全力をかませば新しい発見ができるかもしれない。やりたいことができ、しかも、ついでにアフリカの食糧問題も解決できる。そのうえ、成果を引っ提げて凱旋すれば、日本の研究機関に就職が決まる可能性も極めて高い。運良く国から2年間の支援を受けられることになり、現地語も話せないまま、アフリカに行ってみることにした。

▲ 人生を賭けた相手・サバクトビバッタ

誰もやらないのには理由がある

確かにバッタの研究者はアフリカに来ておらず、立ち位置的には独占状態になったが、他の研究者たちが来ない理由がすぐにわかった。やたらと暑いし、イスラム教の国のため、酒が飲めないし、豚肉も食えない。おまけに話す言葉も違うし、仲良しの友達もいない。ないない尽くしのオンパレードで、不便な生活を余儀なくされた。なるほど、新天地すぎて誰も来たがらないわけだ。研究者と言えども人間だ。人生を楽しみつつ充実した研究生活を送りたい。夢のためとはいえ、なんだこの不便な人生は。己の不幸を呪いそうになったが、むしろ一時の辛抱で昆虫学者になれるのだったらお得じゃないか！ この苦労に耐え抜いた先に栄光が待っているのだ。しかし、所詮は凡人、全力を尽くしたものの、国から支援を受けていた2年間の滞在中にさしたる成果をあげることなく、無収入に陥った。ここで夢を諦めてしまっては一生後悔するのは目に見えていた。諦めるにしても思いつくことをやり尽くしたら、きれいさっぱり諦められるはず。貯金と相談したら、1年間はアフリカに残れそうだ。ラスト1年に全てを賭けることにした。

掟破りの広報活動

いつまで経っても日本ではバッタ研究の重要性は一向に高まらない。ならば、自分で高めてしまえ！ ということで、バッタ問題を知ってもらうための広報活動をすることにした。日本の研究者がアフリカでバッタ研究を行う意義が国民の皆様に理解されたら、政府や大学が動いて就職先が生まれるはず。とはいえ、紹介したいものが「バッタ」である。経験上、バッタについて熱く語るとキモいと言われることが多く、バッタそのものに関心を抱いてくださる奇特な方は少数だ。自分の経験上、『情熱大陸』や『プロフェッショナル』などのテレビ番組では、取り組んでいる事柄よりも、それに挑んでいる『人』に興味を持つことが多かった。そこで、自分自身に興味を持ってもらい、そのついでにアフリカのバッタ問題を知ってもらう作戦に出た。「バッタ博士、31歳無収入、職場はアフリカ」という肩書きで日常生活やバッタの豆知識などを発信する。アフリカにいながらにして、ネットを使えば情報発信が誰にでもできる。ブログで面白おかしいことを紹介すると、それ

▲ ルンルン気分でバッタに迫る

▲ ファンサービスの仕込み。知ってもらうためにはいくらでもピエロになる心づもり

だけで色んな人が興味を持ってくれる。ビジネス誌で連載をしたり、一時帰国したときは講演会やらトークショーやらで宣伝する。世間一般的には金がなければどうしようもないが、この無収入と言うのは最高の武器になると睨んでいた。本気で物事に取り組んでいることをアピールできる格好の材料になる。しかも、この不遇はネタになる。そもそも日本人は、「ヒーローはピンチを乗り越えて復活する」という美談が好きである。無収入を乗り越え、アフリカのバッタ問題を解決する、という壮大な話に興味を持って下さるファンがどんどん増えていった。

それまで、自分よりもすごい人たちがいるのに半人前な姿を人様にさらけ出すのは恥ずべきことで、ある程度出来るようになるまで表舞台に立つのは控えたほうがよいと思っていたが、逆に中途半端な姿をさらけ出すことで、力強く応援してもらえた。こうして、少しずつ日本にバッタ問題の認知度が上がっていった。

噛み合った歯車

取り組みを始めて1年後、その道で活躍する若手研究者を支援する京都大学白眉プロジェクトに採用され、ピンチを脱した。引き続き、現職でもバッタ問題に従事している。我ながらうまくいきすぎたと思う。アフリカに渡り、「やりたいこと、できること、求められていること」この3つがうまく組み合わさり、さらに応援が後押ししてくれたおかげで歯車が回り始めた、気がしている。

バッタのことを広く知ってもらおうと磨いた文章能力のおかげで、出版した「バッタを倒しにアフリカへ」（光文社新書）が、20万部を超えるベストセラーになった。若かりし頃の努力が思わぬ形で未来の自分に返ってきた。

人様に夢を語るのは気恥ずかしいけど、周りに打ち明けると思わぬ形で助けてもらえたりして流れが良い方向に向かっていった気がする。夢を語ると自分の気持ちが高まるし、周りの人たちも前向きになり、お互いに励まし合えるようになり、良い事づくめだ。生活とのバランスも考えなければならないから夢だけを追いかけるわけにはいかないかもしれないけど、夢に無邪気に突っ走る人たちを心から応援したい。

▲ 著書『バッタを倒しにアフリカへ』の表紙

音楽の万華鏡 45

拍はビートかパルスか

前回（Vol.126）に引き続き「拍」について考えてみたい。「拍」を『音楽中辞典』（音楽之友社2002）で調べてみると、最初に「拍子の単位」と書いてある。ところが、世界の音楽には、拍子はないが、拍はあるという音楽がたくさんある。たとえば、こどもの唱える「どれにしようかな、神様の言う通り」というのがそうである。

歌詞の文字に従って、拍ははっきりと感じられるのに、何拍子だかよくわからない。原則、4拍子で書かれることになっているオペラのレチタティーヴォのなかにも、この手のリズムはよく見られる。4拍子で書かれていても、実際には、4拍子のアクセントではなく、言葉のアクセントに従って、不規則なアクセントがつくので、拍子感は無い。このように、拍はあるが拍子はないというリズムは、世界中、どこにでも存在しているのである。

拍が「拍子の単位」なら、拍子の単位になっていない時間の刻みのことは、何と呼んだらいいのだろうか。

じつは、西洋の音楽用語を日本語に訳すときに、二つの言葉に対して、同じ「拍」という言葉が充てられた。拍子の単位となる時間の刻みのことは、英語でbeatという。フォービートとかエイトビートという言葉を思い浮かべればよい。いっぽう、拍子の有無にかかわらず、等間隔の時間の刻みのことはpulseという。日本語ではどちらも「拍」と訳されることが多い。後者については「パルス」とカタカナ書きして、beatの拍と区別することもある。

「拍」を「拍子の単位」であると説明した『音楽中辞典』では、beatの拍の説明をしているのであって、pulseの「拍」の説明はない。また「パルス」という項目には、「継起時間の短い音」という説明はあるが、音楽の時間的な単位、という意味は記されていない。

この辞典では、「いくつかの拍が連続し、そこにアクセントの強弱（強拍、弱拍）の周期的パターンを生じるとき、そこにさまざまな拍子（2拍子、3拍子）が生みだされる」とある。この説明を読めば、拍は、周期的なアクセントのパターンが生じなくとも、存在しているようである。この拍はパルスの意味で用いられている。この説明は、クーパーとマイヤーという人が書いた「音楽のリズム構造」という本で説明されているものに、きわめて近いが、クーパーとマイヤーは、アクセントは必ずしも強弱アクセントでなくてもよいと考えている。たとえば、ドミミドミミドミミドミミという音のつながりを聴いたとき、そこに強弱のアクセントはなくとも、3拍子が感じられるのではないだろうか。

薦田治子（本学音楽学教授）

シカゴに響いた武蔵野サウンド

～ウィンドアンサンブル米国演奏旅行レポート～

昨年12月、本学ウィンドアンサンブルが、米国シカゴで毎年冬に開催される吹奏楽の世界的イベント『第72回 ミッドウェスト・クリニック』に出演しました。本学の出演は、1995年、2006年につづいて3度目。指揮にインディアナ大学名誉教授、本学名誉教授のレイ・E.クレーマー氏を迎え、日々の研鑽によって培われた流麗な武蔵野サウンドを披露し超満員の会場を沸かせました。今回はこの演奏旅行の模様をレポートします。

ミッドウェスト・クリニックとは？

毎冬、シカゴを舞台に開催されている、世界各国の楽譜出版社や楽器メーカーのブース展示・吹奏楽のみならず、管弦楽、室内楽といった様々な形態の演奏会を行う催し。1946年のスタート以来、その規模は年々拡大し、現在では世界約30ヵ国から総勢2万人もの音楽関係者や音楽団体が集い、さらに世界的な作曲者や指揮者、すぐれた吹奏楽団が一堂に会する吹奏楽界における世界最大規模のイベントとなっています。

地元のハイスクールで演奏会

現地時間12月16日の午後3時、シカゴ・オヘア空港に着いた一行。空港でクレーマー教授夫妻と合流してホテルへ向かうと、今回のクリニックでの演奏会でゲストコンダクターを務めるジェームズ・M.ランブレクト教授（オーガスタナ大学）、リチャード・メイン教授（ノーザン・コロラド大学）、テリー・オースティン教授（バージニア・コモンウェルス大学）が夫人と共に出迎えてくれました。

17、18の両日は、クレーマー教授のかつての教え子がバンドディレクターを務める地元のセント・チャールズ・イースト・ハイスクールとダウナーズ・グローヴ・サウス・ハイスクールで合同の演奏会を開催。生徒、保護者、近隣の方々が詰めかけた温かな雰囲気の会場で、本学メンバーも気持ちよく演奏し拍手喝采を浴びました。また両日とも演奏会の前に交流会が開かれ、生徒たちと親交を深めました。

クリニック本番前日の19日は、実際の会場を訪れてリハーサル。お揃いのTシャツ、パーカーに身を包んだ皆の表情には、明日に向けてのよい緊張感が見受けられました。また、過去2度の出演で高い評価を得た武蔵野だけに、リハーサルには大勢の見学者が訪れました。

▲ セント・チャールズ・イースト・ハイスクールでのコンサート

▲ 大勢の関係者に見守られて
クリニック本番 前日のリハーサル

出色の演奏で満員の観客を魅了

そして、いよいよ本番当日。超満員の観客は立ち見を含めて2,700名、開場前には入場を待つ人々の長蛇の列ができました。演奏会冒頭、1曲目に因んで自転車を押し、ヘルメット姿でクレーマー教授が登場。このユニークな演出で客席が笑顔に包まれるなか、演奏会がスタート。

この日のプログラムは、K.M.ヴァルチック「プロトン」を始め、J.A.ジルー氏、P.ミーチャン氏という著名作曲家の新作初演が3曲。さらに、フルートセクションの精緻な演奏が際立つP.モルラッキ「スイスの羊飼い」、主催者側からの要望で中高校生にも演奏できるJ.P.スーザ「行進曲《白い薔薇》」など、多彩なラインナップ9曲で構成されました。加えて、今回はクレーマー教授のほか、3人のゲストコンダクターが1曲ずつ指揮をされ、ひとつのコンサートの中で、それぞれ個性の違う4人の指揮者の音楽に触れられるという楽しみもありました。

クレーマー教授と共に、7月と12月、東京での定期演奏会を経てこの日を迎えた学生たちの完成度の高い演奏に、客席は最初から大いに沸きました。それをさらにヒートアップさせたのが、トランペット・ソロを務めたクリストファー・マーティン氏のために作曲された、J.A.ジルー「《タブー》―独奏トランペットとウィンドアンサンブルのための―」。シカゴ交響楽団、ニューヨーク・フィルハーモニックの首席奏者を歴任している氏の超絶テクニックとウィンドアンサンブルの美しいサウンドのコラボで、客席のボルテージは最高潮に。

そしてプログラムの最後を飾ったのは、J.A.ジルー「交響曲第5番《エレメンツ》より第3楽章〈風〉」。作曲者自身が本公演で演奏すべきだと主張した曲を完璧なかたちで客席にとどけ、スタンディングオベーションとひときわ大きな拍手がいつまでも止みませんでした。あまりの反響の大きさから、急遽アンコールを2曲披露し、大盛況のうちに演奏会は終了しました。

▲ クレーマー教授が自転車をひいて登場

この演奏旅行から得たもの

本番終了後のレセプションでは、大役を務め上げた安堵感のなか、全員がリラックスして心地よいひとときを過ごしました。途中、諸先生方からご挨拶をいただき、学生からはクレーマー教授に色紙と歌「夜明け」

▲ トランペット・ソロのクリストファー・マーティン氏

ミッドウェスト・クリニック演奏会プログラム
2018年12月20日 19:30～

◆K.M.ヴァルチック：プロトン
（クレーマー教授・武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブルの委嘱作品）
◆D.マスランカ：ファースト・ライト
◆D.グランサム：シェナンドァー
◆P.モルラッキ：スイスの羊飼い
◆J.P.スーザ：行進曲《白い薔薇》
◆J.A.ジルー：《タブー》
―独奏トランペットとウィンドアンサンブルのための―
（クレーマー教授・武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブルの委嘱作品）
◆高 昌帥：桜花の光跡
◆P.ミーチャン：岸辺に打ち寄せる波
◆J.A.ジルー：交響曲 第5番《エレメンツ》より第3楽章〈風〉
《アンコール》
◆J.ウィリアムズ：ウィズ・マリス・トワーズ・ノン
◆讃美歌：ひいらぎかざろう

▲ 超満員となったミッドウェスト・クリニックの演奏会場（マコーミックプレイス）

▲ 左からオースティン教授、メイン教授、クレーマー教授
マーティン氏、ランブレクト教授

▲ 参加したメンバー
一人ひとりの思い出に残る
演奏旅行でした

をプレゼント。感動のあまり涙ぐむ先生の姿に、学生たちも大変感激しました。

演奏旅行の最終日。ランチを兼ねたクレーマー夫妻とのお別れ会の後は、シカゴ美術館の見学、モールでの買い物、そして全員が楽しみにしていたシカゴ交響楽団演奏会の鑑賞。この日のプログラムはヘンデル「メサイア」。華やかな演奏に酔いしれ、充実したツアーの最後の夜が暮れました。

翌日の昼にシカゴを発ち、24日の午後4時に成田に到着。全員元気で、大きなトラブルもなく、無事に今回の演奏旅行を終えました。参加したメンバーは一様に、この素晴らしいイベントに参加できた喜び、感動を口にしています。

「クレーマー先生やゲストコンダクターの先生方、マーティンさん、そして参加したメンバーと一緒にPlay with Heartの演奏ができ、私の一生の宝物になりました」(4年 勝亦真子)

「ミッドウェスト・クリニックによって、改めて音楽の素晴らしさ、楽しさを認識する事が出来ました。帰国する頃には、僕の心はあらゆる人や物事に対して感謝の気持ちで満たされていました」(4年 平野貴大)

――世界の音楽関係者が注目する権威ある舞台での演奏やアメリカの若者たちとの交流、そして異文化にふれて見聞を広めることもでき、参加した学生にとっては忘れがたい貴重な体験、そして今後の人生において大きな糧となったに違いありません。

寄せられた賛辞

本学ウィンドアンサンブルの第72回ミッドウェスト・クリニックでの演奏に対し、多くの音楽関係者から賛辞が寄せられました。

◎Chad Nicholson（アリゾナ大学バンドディレクター）
武蔵野のウィンドアンサンブルは、さまざまな意味で世界中の吹奏楽団体が今後の方向を模索していく上でのモデルとなっています。優れた演奏技術と成熟した演奏表現、さらに豊かな音質を持ったアンサンブルといえます。その表現力豊かな質の高い演奏によって、聴衆が曲の様々な場面で魅了されていました。このようなウィンドアンサンブルの演奏を間近で聴くことは本当の喜びです。

◎Tim Lautzenheizer（ミッドウェスト・クリニック理事会メンバー）
私は「文章を書くこと」を生業としているのですが、私の語彙をもってしても、武蔵野のウィンドアンサンブルの“並外れた”(といってもまだ控えめな表現ですが！)レベルのコンサートをどれほど楽しんだかを表現するには不十分です。武蔵野音楽大学のミッドウェスト・クリニックでの演奏をこれまでにも聴いていましたので、今回もThe Bestの演奏になることは確信していましたが、彼らはEven Better（更に素晴らしい）な演奏を披露しました！

◎Julie Ann Giroux（作曲家）
武蔵野のウィンドアンサンブルは、毎回私を驚かせてくれます。高い演奏レベル、卓越した演奏技術、演奏にかける真摯な姿勢のすべてが、作曲家にとって理想です。

◎Michael Fiske
（ジュリエットハイスクール　元バンドディレクター）
武蔵野の学生達の高い芸術性とレイ・E.クレーマーの熟練された指揮によって、魔法のようなパフォーマンスが生み出されました。シカゴでの演奏は私が今までに聴いた中で、間違いなく最高のものでした。

＊この他D. Grantham（作曲家）、H. Blake（元バンドディレクター）、V. Allen（ジュリアード音楽院　教師兼指揮者）、P. Meechan（作曲家）、R. Dorsey（ミッドウェスト・クリニック理事）、S. Pratt（インディアナ大学バンドの名誉理事）、S. Jones（オハイオ州立大学）等、多くの皆さんから賞賛のコメントが寄せられました。

江古田新キャンパス探訪 8

洗練された美しさをたたえる重厚な佇まい

「外観デザイン」

（文：福井直昭 副学長）

江古田キャンパスを初めて訪れた人は、まずその現代的でありながらも重厚感のある外観に惹きつけられます。音楽大学に求められる多様な性能が反映され、周囲の環境に調和しつつ洗練された印象を醸成する外観デザインについて、福井直昭副学長がご紹介します。

ボリュームの増大と街との共存

一般的に建築物を建替える場合は「新築」と呼ばれますが、大規模な本プロジェクトをマクロな視点より捉え、「全ての建築物は既存のコンテクストに対する『増築』である」と考えたところから、外観デザインがスタートしました。ここで言う「既存のコンテクスト」とは、大学周囲の低層住宅街のことです。我々は、江古田/入間両キャンパスの機能統合により要求される「ボリュームの巨大化」と、「江古田の街との末永い共存」という二律背反したテーマに取り組むことになりました。

冗長さを避けつつ華美ではない

計画初期では、周囲の街路をそのままキャンパス内に貫通させるというラディカルな案も設計者より提示されましたが、最終的には学生のセキュリティや回遊性の担保、遮音対策を考え、「外側に対しては適度に閉じ、内側に開く」という構成に落ち着きました。外側に閉じるということは、一歩間違うと退屈な壁面が連続することになりかねません。とは言え商業施設のような煌びやかなデザインでは、教育施設としての品格やデザインの永続性は望めません。音楽にも存在するような人間が直感的に知覚する「時代を超えた本質的な美しさ」は、建築で言うと「形態のプロポーション」と「素材感」の追求に当たると考え、冗長さを避けながらも華美になることのないデザインを模索しました。形態のプロポーションについては、単に美しい「縦横高さの比率」を追求するだけでなく、隣り合う外壁の位置をわざとずらす、直交だけでなく斜めの要素を入れて緊張を和らげる、というようなテクニックも駆使しました。そのように吟味されたプロポーションに、後述する“本物の”建築材料を当てはめることで、建築としての完成度を高めたわけです。

▲ 南西方面から見たS棟／保存した桜と相まって親しみやすい表情をみせている

多様な性能を直截的に反映した素材・デザイン

建物の外装は金属や工業材料ではなく、学生の感性に訴えかけるよう無駄な装飾を避けたコンクリートやタイル、ガラスで構成しています。古くから変わらず使い続けられている素材感を大切にした外装材を採用することは、クラシック音楽における生音の響きを追求することに通じています。また、音楽大学に求められる多様な性能（光、遮音、響き）を素材とデザインに直截的に反映させるという隠れたルール（後に詳述）により、統一感がありながらも各々の建物の豊かな個性が感じられる、武蔵野音楽大学らしい外観を目指しました。

ランダムで現代的なデザインのS棟

南側は、キャンパスの顔としての品格を重視し、重厚なタイルを多用してグレード感を演出していますが、イメージが重くなり過ぎないようアトリウム（エントランスホール）や階段室、展望ラウンジなどをガラス張りにすることで、デザインのバランスを保っています。特にアトリウムは、外部からもキャンパス内部を伺い知ることができるように透明性の高いデザインとし、社会に開かれた大学として活発なアクティビティを発信

▲ キャンパスファサード（正面部分）／タイルが演出する重厚感とガラス張りによる透明感がデザインのバランスを保っている

▲ アトリウム（左がS棟、右がE棟）／夜間は柔らかな光に包まれたガラスボックスとなり、暖かい表情をみせる

▲ S棟西面／室内用途に応じた外装材の配置は、ランダムで現代的な外観デザインとして結実している

▲ キャンパス東面-レッスン室部分（E棟）／自然光を廊下に取り込むための切り込みにより、外観も単調さが回避されている

▲ キャンパス東面-練習室部分（E棟）／外装材のタイルへの切り替えが唐突にならないよう、レッスン室部分との間に縦長プロポーションのガラス張り階段室を挟んでいる

▲ キャンパス東面-ホール部分（N棟）／4つのホールの遮音上、開口部が設けられない代わりに、屋根を斜めにすることで堅苦しさを軽減している

している。また夜は一転して柔らかな光に包まれたガラスボックスとなり、音楽研究の拠り所としての暖かい表情を魅せます。

エントランスに隣接する南西角のS棟の外観は、前述の「室内用途に応じ材料を使い分ける」というルールが最もわかりやすく示されたデザインになっています。それは要求される遮音性能等の違いにより、建物の構造自体が他棟とは異なるためです。S棟には教室を配置しているので柱間隔を長くする必要がある一方、レッスンや練習で大きな音を出すことがないのでコンクリートの厚い壁で囲う必要はありません。したがってS棟だけには鉄骨造（他棟は鉄筋コンクリート造）を採用し、外装材は現地にてパネル状のものを取り付けました。その際、ガラス、タイル、セメント板、吸排気パネルをデザインの上で等価に扱い、機能上必要な位置にこれらの中の最適な材料を取り付ける、という手法をとりました（例：南側1～4階は収納家具を設置する事務室が多く壁面が必要かつキャンパス正面側なので、フォーマルなタイルを使用。同5階は展望ラウンジなので、眺望を得るために総ガラスパネル。西側は教室が多いため、採光のためのガラスパネルと換気のための設備パネルが多め、等）。内部の要請に応じた外装材の配置は、ランダムで現代的な外観デザインとして結実していますが、私はここから音の揺らぎや、音楽の中に存在する「規則性と不規則性」といったものを感じます。また材料の細かい分節は圧迫感の低減につながり、保存した桜と相まって親しみ易い表情を見せながら、重厚感と軽快感が融合された大学の姿を表現しています。

3つの別々な建物が並んでいるような東面

100m超の長さがあるキャンパス東面は、圧迫感を感じないようにレッスン室部分と練習室部分（以上E棟）、ホール部分（N棟）の大きく3つのボリュームに分節することで、住宅街に馴染ませています。

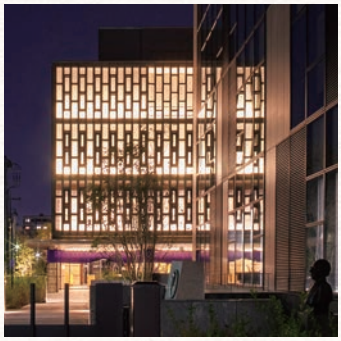
レッスン室部分の外装には、コンクリートを使っています。効率的に小部屋を配置するために中央に廊下をとる形式を採用していますが、この「中廊下型」は、ともするとホテルの廊下のような外光が全く入らない空間になってしまうため、廊下の途中途中に自然光を取り込むための切り込みを設けました。その結果、外観もこのスリットにより分節され、単調さが回避されています。練習室部分は、外装材をタイルに切り替えますが、切り替えが唐突にならないよう、間に縦長プロポーションのガラス張り階段室を挟みました。さらに北側に続くホール部分は、遮音のため開口部が設けられない代わりに、屋根を斜めにすることで堅苦しさを軽減しています。これらの工夫により、東側はあたかも3つの別々の建物が並んでいるかのように見えます。

互いを引き立て合う新旧ホール

ベートーヴェンホールを保存するにあたり、その外観をどこまで残すかは慎重に検討しました。当初は西側だけ残す予定でしたが、学園が伝統の象徴としてエントランス側の壁面も保存するよう設計者に強く働きかけた結果、構造的にかなりの工夫を施して実現に至りました。ショパンプロムナードからアプローチする美しい夕景は、新旧の建物が調和した新しい武蔵野の景色となっています。

このベートーヴェンホールの外装の窓枠プロポーションを

展開したのが、隣接するブラームスホールの外装デザインです。同じ縦横比の窓枠としながら、ガラスの比率を変えることで一転して開放的な表情をみせています。この対比効果により、新旧ホールがお互いを引き立てることに成功しました。



▲ ベートーヴェンホールファサードとS棟（右）／ショパンプロムナードからアプローチする美しい夕景は、新旧の建物が調和した新しい武蔵野の景色となっている

▲ ブラームスホール西面／ベートーヴェンホールと同じ縦横比の窓枠としながら、ガラスの比率を変えることで一転して開放的な表情をみせている

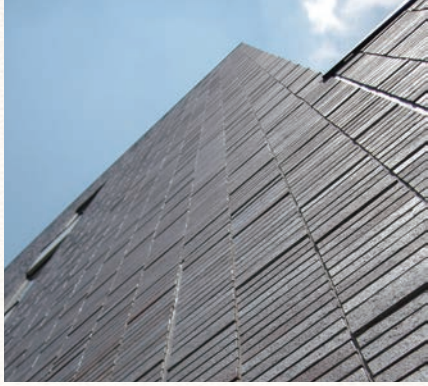
個々の要素の調和が図られたリストプラザ

中庭広場「リストプラザ」を取り囲む建物は、事務室、ロビー、教室、ミュージアム、レッスン・練習室、図書館など機能毎に分化することで、それぞれ特徴的な外観をまとっています。これらの個々の要素は中庭広場によって調和が図られ、キャンパス全体がひとつの街のような景観になっています。内部構成が自然と外観デザインに反映されつつ、多様な個性がひとつのかたちに融合していく――すなわちキャンパスに個と全体の調和（ハーモニー＝「和」）をもたらすことになります。

▲ リストプラザからみたS棟／機能毎に分化した周囲の建物は各々特徴的な外観をまとっているが、これらの個々の要素はプラザによって調和が図られている

飽きのこない千変万化する特注タイル

キャンパス全体が、時流の中でも色褪せないような洗練された佇まいを備えているのは、約38万枚も使用されている特徴的なタイルによるものが大きいでしょう。年月を経ても美しくなお味わいを増すような材料として、耐久性のあるタイルを大々的に使用することを当初から想定し、色、表面のテクスチャー、焼成方法などが異なる多種多様なサンプルを製作し、最終的に「グレー系型押し還元焼成」タイプを選択しました。「還元焼成」とは、一般的な酸化焼成とは異なり窯内への酸素の供給を抑制した焼成方法で、材料である土や釉薬に含まれている金属化合物の化学反応がその時の温度や酸素濃度によって左右されるため、色ムラが生じます。１枚1枚色が異なるだけでなく、1枚のタイルの中でもグラデーションがついているのはそのためです。さらに光と影を演出するため、厚みも15mmと20mmの2種類を製作（20mmを10％混合）しました。このような試行錯誤の結果生まれたのが、天候、時間、見る距離によって様々に表情を変える唯一無二のタイル群です。建設会社曰く「あまり例がない」とのことでしたが、私も施主として実際に愛知県知多半島にあるタイル工場まで製品の検査に出向き、最後まで納得いくよう注文をつけさせてもらいました。



▲ 外壁を彩る特注タイル／１枚１枚色の異なる約38万枚ものタイルは、光と影を演出するため厚みも15mmと20mmの2種類を製作した

▲ リストプラザからみたC棟・E棟／天候、距離、時間によって様々に表情を変えるタイルは、角度によっても色が異なるのがわかる

＊　＊　＊　＊　＊　＊

以上のような様々な配置、分節、材料の工夫等により、冒頭述べた「必要なボリュームの保持と街との共存」という命題をクリアしました。「全ての建築物は既存のコンテクストに対する『増築』である」とは、言い換えると先人、他者へのリスペクトに他なりません。音楽を学ぶこと、並びに本学の建学の精神「〈和〉のこころ」にも通じるという意味でも、まさに本学らしい外観デザインとなったと思います。

思い出をつくった三幼稚園音楽会＆音楽鑑賞会

2月末から3月初頭にかけて、本学附属幼稚園第一❶、第二❷、武蔵野❸の各園で「ひなまつり音楽会」「表現発表桃の会」が行われました。この催しは、本学園ならではの恵まれた音楽環境のもと、リズム重視のオルフメソードに則って音楽の基礎力を育み、楽器演奏にも取り組んできた園児たちが日頃の成果を発表するもの。当日は大きな舞台に少々緊張しながらも、木琴・ヴァイオリン演奏、リズム表現や合唱・合奏などを大勢のお客様の前で披露しました。大きな拍手をいただき、どの園児も満面の笑顔をうかべているのが印象的でした。

また3月7日には、卒園を間近にした三園の年長児親子を対象に、ベートーヴェンホールで「三園合同音楽鑑賞会」を実施。パイプオルガンを始め普段なかなか聴くことのない様々な楽器の音色にふれ、みんな興味津々の様子。最後には、全員で『いちねんせいになったら』を合唱し、可愛い歌声をホールいっぱいに響かせました。

外国人教授紹介（2019年度前期）

ケマル・ゲキチ *Kemal Gekić*（ピアノ／クロアチア）

1962年クロアチア生まれ。旧ユーゴのノヴィサッド音楽院で学ぶ。史上最高得点でディプロマを取得。1981年国際リスト・ピアノコンクールで受賞。1985年のショパン国際コンクールでは、聴衆の圧倒的支持を得て「最優秀ソナタ特別賞」受賞。その後、世界各地で活発な演奏活動を展開し大好評を博す。幅広いレパートリーでCD録音も積極的に行い、特にリストの演奏では第一人者として不動の地位を築いている。フロリダ国際大学教授。

クリスティアン＝フリードリヒ・ダルマン *Christian-Friedrich Dallmann*（ホルン／ドイツ）

ハンス・アイスラー音楽大学にてクルト・パルムのもとで研鑽を積んだ後、1978年にマルクノイキルヒェン国際音楽コンクールホルン部門で第1位受賞。同年ベルリン交響楽団（現ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団）のソロホルン奏者となり、以後22年以上首席奏者を務めた。またヘルムート・リリング音楽監督のもとシュトゥットガルト国際バッハアカデミーに招かれ、数多くのプロジェクトでソロホルンを担当。古楽器による演奏活動もベルリン古楽アカデミーのメンバーとして、多くの演奏旅行とCDの録音を行った。ハンス・アイスラー音楽大学、デトモルト音楽大学を経て、現在はベルリン芸術大学教授として後進の指導にも当たり、優れたホルン奏者を多数輩出している。

ジェームズ・M. ランブレクト *James M. Lambrecht*（ウィンドアンサンブル指揮／アメリカ）

ウィスコンシン大学ホワイトウォーター校を卒業後、インディアナ大学にて指揮法とトランペットを学び、同大学で修士号及び博士号を取得。ミシガン州にあるオリベット大学のバンドディレクター、アシスタントプロフェッサーを務めた後、1988年よりオーガスタナ大学のバンドディレクター兼トランペット教授としてシンフォニックバンドの指揮者を務める他、トランペット奏法、金管アンサンブル奏法、音楽理論などを指導するとともに音楽学部長の要職にもある。また、オペラ@オーガスタナ・オーケストラの指揮者も務め、1994年～98年にはQuad City Youth Symphony Orchestraの指揮者・音楽監督としても活躍した。全米大学吹奏楽指導者協会、全米吹奏楽協会、国際トランペット協会メンバー。

MUSASHINO 掲示板

平成30年度音楽大学卒業生演奏会（桃華楽堂）

平成31年3月20日、皇居内にある音楽ホール桃華楽堂で、在京の5音楽大学の代表による「音楽大学卒業生演奏会」が、皇后陛下ご臨席のもと開催されました。

本学からは、主演：齋藤幹弥さん（オーボエ独奏）、助演：大日方里奈さん（ピアノ伴奏）が出演し、シューマン作曲「アダージョとアレグロ　変イ長調　作品70」を披露させていただきました。

平成30年度クロイツァー賞受賞者

わが国のピアノ音楽発展に寄与したレオニード・クロイツァー教授の名を冠した「クロイツァー賞」。教授とゆかりが深かった東京藝術大学、国立音楽大学、武蔵野音楽大学の大学院から、毎年特に優れた成績を修めた学生が選出されます。平成30年度、本学からは岩武 歩さんが選ばれました。

記念演奏会は、2019年7月11日19：00　東京文化会館小ホールで開催されます。

武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金　ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、教育環境整備基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。　学校法人　武蔵野音楽学園

※ご芳名（五十音順）は、平成30年11月1日から平成31年1月31日までにご寄附いただいた方々です。それ以降の方々は、次号にて掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきました。何とぞご了承ください。

※本学ウェブサイトからも、クレジットカード決済によりご寄附のお手続きができます。是非ご利用ください。

【同窓生】大石隆子様　金井真由美様　斎藤叡子様　笹倉 強様　萬田充秋様　安田久美子様

【在学生・同ご父母】田島正弘様　寺﨑敬子様　持田隼人様　安川寛昭様　山口達之様　山元良平様

【役員・教職員・一般・他】岡 珠世様　古池 好様　坂下 寛様　坂下裕子様　高橋美智子様　富樫英夫様　戸田史郎様
福井直敬様　堀内康雄様　前川愼一郎様　渡邉規久雄様　（他に匿名を希望される方4名）

栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）

（順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの）

●埼玉県「平成30年度下總皖一音楽賞」受賞
音楽文化貢献部門　井上久美子（本学特任教授）
音楽文化発信部門　北川曉子（昭和42年大学ピアノ専攻卒業）

●平成30年度和歌山市文化功労賞受賞　多田佳世子（昭和35年短期大学部声楽専攻卒業）

●2019年度（第30回）「五島記念文化賞」　オペラ新人賞受賞　大西宇宙（平成20年大学声楽専攻卒業、本大学院修了）

●第48回イタリア声楽コンコルソ
シエナ大賞受賞　杉尾真吾（平成25年大学声楽専攻卒業、本大学院修了）
シエナ大賞部門　金賞受賞　川口詩子（平成21年大学声楽専攻卒業、本大学院修了）
ミラノ大賞部門　金賞受賞　奥秋大樹（平成28年大学声楽専攻卒業、本大学院修了）

●第19回北関東ピアノコンクール　大学生Sの部　第1位入賞、最優秀賞受賞　髙橋七海（大学1年ピアノ専攻、附属高校卒業）、第3位入賞（2位なし）　太田梨奈（大学3年ピアノ専攻、附属高校卒業）、一般Sの部　第1位入賞、朝日新聞社賞受賞　藤井千裕（平成29年大学ピアノ専攻卒業、本大学院2年）、高校生Sの部　第1位入賞、朝日新聞社賞受賞　石川千夏（附属高校2年ピアノ専攻）、●第10回東京ピアノコンクール　全部門　最優秀賞受賞、高校部門　第1位入賞　曽田　響（附属高校3年ピアノ専攻）、●第4回パン・パシフィック現代音楽コンクール　ソロ部門　第1位入賞　荻澤紀子（平成15年大学フルート専攻卒業）、第2位入賞　川鍋さなえ（平成12年大学フルート専攻卒業）、●第28回日本クラシック音楽コンクール　声楽部門　一般女子の部　第2位入賞　林　真悠美（平成28年大学声楽専攻卒業、本大学院修了）、ホルン部門　大学の部　第3位入賞（1、2位なし）　杉山なつみ（大学1年ホルン専攻）、●第20回ショパン国際ピアノコンクール in ASIA全国大会　大学生部門　銀賞受賞　結束真琴（大学3年ピアノ専攻）

※上記の他多数。大学ウェブサイトをご覧ください。

教員免許状更新講習のお知らせ

武蔵野音楽大学では、2019年度も教員免許状更新講習を開講します（現在認可申請中）。本学では、小学校、中学校および高等学校の、音楽を中心とする教員を対象に、必修領域6時間と選択必修領域6時間、そして選択領域18時間、合計30時間を開講します。

領域	期間	会場
①必修領域（6時間）	7/23・24の2日間	江古田キャンパス
②選択必修領域（6時間）		
③選択領域（6時間×3日間）	7/25～27の3日間	

要項の請求について

各講習会要項は、江古田キャンパスで取り扱っています。郵送をご希望の方は、本学ウェブサイト内の「資料請求フォーム」からお申し込みいただくか、広報室へお電話にてご請求ください。（TEL.03-3992-1125）
本学ウェブサイト http://www.musashino-music.ac.jp/
「教員免許状更新講習のご案内」は4月下旬、「夏期講習会要項」は5月発行の予定です。

夏期講習会のお知らせ

2019年度の武蔵野音楽大学、武蔵野音楽大学附属高等学校の夏期講習会（音楽大学受験講習会、高校音楽科受験講習会、社会人のための夏期研修講座、免許法認定講習）を、下記のとおり実施します。

講習会名	期間	会場
大学受験講習会	8/ 1～8/ 4	江古田キャンパス
高校音楽科受験講習会	8/ 1～8/ 3	
社会人のための夏期研修講座	7/28～7/30	
免許法認定講習 ※教員免許状更新講習とは異なります	7/23～8/ 3	

編集後記

才能がないなら、努力しよう。努力を認めてもらうためなら、何でもしよう。昆虫学者として職を得るために、ネットやSNS等を駆使して自分を売り込み、願いを叶えた前野ウルド浩太郎さん。そのセルフプロデュース能力は、見事なものです。夢を貫き、夢を実現させた生き方に学ぶところは多そうです（編）。

2019年度 4月～7月 演奏会のお知らせ

音楽学部新人演奏会 ～平成30年度卒業生による～	4月22日㊊ 19：00 ヤマハホール	￥1,500〈全席自由〉
グジェゴシュ・ニェムチュク ピアノ・リサイタル 曲目＝ショパン：マズルカ Op.17、30、50、59／幻想ポロネーズ 変イ長調 Op.61／ピアノ・ソナタ 第3番 ロ短調 Op.58 他	4月26日㊎ 18：30 ブラームスホール（江古田）	￥1,000〈全席自由〉
大学院修士課程新人演奏会 ～平成30年度修了生による～	5月17日㊎ 18：30 ブラームスホール（江古田）	￥1,500〈全席自由〉
教員による≪管楽器アンサンブル演奏会 2≫ 出演＝青山聖樹（Ob.）、北島 章（Ob.）、北村貴子（Ob.）、伊藤量子（Ob.）、山本正治（Cl.）、三倉麻実（Cl.）、十亀正司（Cl.）、加藤明久（Cl.） 岡崎耕治（Fg.）、吉田 將（Fg.）、山田知史（Fg.）、丸山 勉（Hr.）、山本 真（Hr.）、西條貴人（Hr.）、村中美菜（Hr.） 曲目＝モーツァルト：ディヴェルティメント ヘ長調 K.213／ディヴェルティメント 変ロ長調 K.186／セレナード 変ロ長調 K.361 ≪グラン・パルティータ≫	6月14日㊎ 18：30 ブラームスホール（江古田）	￥1,000〈全席自由〉
ニュー・ストリーム・コンサート36 ～ヴィルトゥオーゾコース演奏会～	6月20日㊍ 18：30 ブラームスホール（江古田）	無料〈全席自由・要入場整理券〉
ニュー・ストリーム・コンサート37 ～ヴィルトゥオーゾコース演奏会～	6月21日㊎ 18：30 ブラームスホール（江古田）	無料〈全席自由・要入場整理券〉
ケマル・ゲキチ ピアノ・リサイタル	6月27日㊍ 18：30 ベートーヴェンホール（江古田）	￥1,000〈全席自由〉
ウィンドアンサンブル演奏会 指揮＝ジェームズ・M．ランブレクト 曲目＝2019年度 全日本吹奏楽コンクール課題曲より 他	7月12日㊎ 18：30 東京オペラシティ コンサートホール 7月15日㊊祝 14：00 石川県こまつ芸術劇場うらら 大ホール	￥1,500〈全席指定〉 一般￥1,500／小中高校生￥1,000〈全席自由〉

※上記の他、学生による演奏会等、多数開催。詳細は本学ウェブサイトをご覧ください。
※やむを得ない事情により、出演者・曲目等を変更する場合もありますので、あらかじめご了承ください。
※チケットは本学ウェブサイトでも予約ができます。
●お問合せ 武蔵野音楽大学演奏部 TEL.03-3992-1120 ●武蔵野音楽大学ウェブサイト http://www.musashino-music.ac.jp/

2019 中高生のためのステップ・アップ・プログラム

初心者の方から上級者の方まで、楽器や歌が上手くなりたい！ という中高生の皆さん、音楽大学という理想的な音楽環境で、一流講師陣によるレッスンに参加し、スキルアップに役立ててください。

種別	開催日	会場
ピアノ・声楽	5月12日㊐	江古田キャンパス
管打楽器・弦楽器	6月 2日㊐	

【お問合せ】武蔵野音楽大学 入学センター TEL.03-3992-2500
E-mail：nyugaku-c@musashino-music.ac.jp

2019 オープンキャンパス・学校説明会＆体験レッスン（5月～8月）

《オープンキャンパス》《学校説明会&体験レッスン》を下記の日程で開催します。ぜひご参加ください。

◎学校説明会&体験レッスン

開催日	開催地	会場
5月26日㊐	愛知県名古屋市★	日響楽器 池下店
	熊本県熊本市	大谷楽器 上通センター
6月 9日㊐	宮城県仙台市	常盤木学園
6月23日㊐	北海道札幌市★	六花亭札幌本店きたこぶしホール
	静岡県静岡市	すみやグッディ SBS 通り店
6月30日㊐	神奈川県横浜市	ミュージックアベニュー横浜（ヤマハ）
	福岡県福岡市★	アクロス福岡
7月 7日㊐	富山県富山市	富山県民共生センター サンフォルテ
7月14日㊐	香川県高松市★	サンポートホール高松 第1小ホール

◎オープンキャンパス［会場：武蔵野音楽大学 江古田キャンパス］

開催日	主な実施内容
6月16日㊐★	学科紹介、体験レッスン、学生によるコンサート
7月14日㊐★	学科紹介、体験レッスン、レッスン公開、体験授業
8月25日㊐★	学科紹介、体験レッスン、学生によるコンサート

※附属高等学校の説明会は★印のついた開催日、開催地のみ実施します。 ※事前申し込みが必要です。詳細は本学ウェブサイトをご覧ください。
※9月以降も《オープンキャンパス》《学校説明会&体験レッスン》を開催します。

【お問合せ】武蔵野音楽大学 入学センター TEL.03-3992-2500 E-mail：nyugaku-c@musashino-music.ac.jp

アコーディオン

ホーナー作　ドイツ　幅52cm

アコーディオンは、歌うが如く豊かに音を表現できる楽器として、わが国でも特に昭和の時代に人気を博した。かつての「NHKのど自慢」の映像を思い浮かべる人も少なくないだろう。

アコーディオンは「フリーリード」と呼ばれる調律された金属製のリードを鳴らすことで発音する。フリーリードは日本の笙にも使われているが、一枚の金属板から切り出された笙のリードが、息を吹き込んでも吸い込んでも音を出すのに対し、アコーディオンのリードは、片側から別の金属片を固定し、発音しやすいように先端を持ちあげているため、一方方向の風にしか反応しない。そのため、この楽器は空気の吹き込みと吸い込みで異なるリードが鳴るように、リードを交互逆向きに並べて配置している。

1822年、ドイツのブッシュマンは、フリーリードを蛇腹の空気で鳴らす楽器を考案した。これがアコーディオンの祖形と考えられている。この楽器を参考に1829年、オーストリアのデミアンは、キイ操作で和音演奏が可能な楽器を発明し「和音（アコード）の出せる楽器」という意味で「アコーディオン」と命名した。

写真の楽器は「日本資本主義の父」として名高い渋沢栄一氏の孫、故渋沢一雄氏が使用したドイツの老舗ホーナー社のアコーディオンである。渋沢一雄氏は本学園でチェロを学び、その後渡米しアコーディオン奏者として活躍した。帰国後は画家としての才能も発揮し、田園調布にアトリエを構えた。2014年、「母校に夫の遺志を伝えたい」との希望から、本学楽器ミュージアムはご令室より多数の関係資料の寄贈を受けた。

（武蔵野音楽大学楽器ミュージアム所蔵）

目 次

創立90周年を迎えるにあたって …… ❶
福井直敬

夢を貫き、己を磨く …… ❷
前野ウルド浩太郎

音楽の万華鏡 …… ❺
拍はビートかパルスか　薦田治子

Campus Eye …… ❻
シカゴに響いた武蔵野サウンド

江古田新キャンパス探訪⑧ …… ❾
外観デザイン

MUSASHINO NEWS …… ⓬
- 思い出をつくった三幼稚園音楽会＆音楽鑑賞会
- 外国人教授紹介（2019年度前期）
- MUSASHINO掲示板
- 武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々
- 栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）
- 教員免許状更新講習のお知らせ
- 夏期講習会のお知らせ
- 2019年度 4月～7月　演奏会のお知らせ
- 2019 中高生のためのステップ・アップ・プログラム
- 2019 オープンキャンパス・学校説明会＆体験レッスン（5月～8月）

武蔵野音楽大学大学院
博士前期課程・博士後期課程
武蔵野音楽大学
武蔵野音楽大学別科
武蔵野音楽大学附属高等学校
武蔵野音楽大学第一幼稚園
武蔵野音楽大学第二幼稚園
武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園
附属音楽教室 江古田・入間・多摩

発　行

学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス　●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121（代表）
入間キャンパス　●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111（代表）
パルナソス多摩　●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711（代表）

http://www.musashino-music.ac.jp/

2019年4月1日発行　通巻第129号